

自由意志論を生み出す心理：記述的研究に向けて

太田紘史

自由意志論は、決定論や非決定論についての問題と関わるという点で形而上学的な領域であるだけでなく、道徳的責任についての問題と関わるという点で倫理的な領域でもある。すなわち、自由意志論で探求されているのは「求めるに価する自由」なのである (Dennett 1983; Kane 1996)。

だがそうした自由にまつわる哲学的な問題について、少なく見積もっても数百年のあいだ哲学者達は明示的な議論を行ってきたにも関わらず、広い合意を得られるような答えは見いだされていない。とりわけ、自由意志は決定論と両立するかどうか、道徳的責任が決定論と両立するかどうかという最も初歩的にして基本的な問題が、依然として係争中である。ある調査によれば、いわゆる両立論を支持する哲学者が目下数的に優勢ではあるが (Bourget & Chalmers 2014)、だからといって両立論を軸として論争が落ち着きを見せつつあるわけではない。実際、世界中で連日、自由意志について論じる発表が行われ、論文が公表され、哲学書や論文集が出版されており、論争は広がる一方である。日本科学哲学会もまた、そうした舞台の一つである。

今回私が試みるのは、自由意志と道徳的責任をめぐるこうした問題や論争の背景にある心理的要因を特定することである。そのために私は、近年の実験哲学、道徳心理学、社会心理学からの実証的知見を参照する。

私の提案では、第一に、個人内で自由意志の概念は複合的であり (あるいは複数の自由意志概念が存在しており)、それらは複雑な仕方で道徳的責任の帰属を支えている。第二に、個人内で自由意志の概念を統一化したり、あるいは自由意志や道徳的責任についての思考を整合化したりすることに抵抗する心理的要因が存在する。第三に、個人間でそうした統一化や整合化を図ることに抵抗する心理的要因も存在する。私は、こうした心理的要因が自由意志論の問題を生み、そしてその論争の収束を難しいものになっていると提案する。

このように今回私が試みるのは、自由意志論を生み出す心理についての記述的研究である。時間的な余裕があれば、私が現在行っている関連した実験的研究も紹介したい。